

報徳仕法とは ①

報徳仕法とは、尊徳の教えに基づく農村のたて直しのことをいいます。尊徳の教えは尊徳亡き後も尊徳の子尊行や弟子たちに引き継がれ、各地で報徳仕法が行われました。

尊徳の説く『報徳』とは、過去・現在・未来を貫く「天・地・人の徳」に報いることです。人間主体の勤労と徳の万物を育む天地の徳とが合うことによってはじめて人間は生存することができることから、その徳に感謝し、報いる気持ちをもって生きなければならないとしています。

尊徳の一番弟子である相馬中村藩出身の^{とみたこうけい}富田高慶は、尊徳の死後、その教えを世に広めるため『報徳記』を著しました。

その中で、報徳仕法の根本は「^{しせい}至誠」にあるとし、その上で「^{きんろう}勤労」「^{ぶんど}分度」「^{すいじょう}推譲」が基本だと述べています。

◇「至誠」とは、まっすぐで思いやりのある心のことをいう。

◇「勤労」とは、熱心に働くことである。

◇「分度」とは、自分にふさわしい生活をするためである。

◇「推譲」とは、働いて得た余分は、将来の自分のために貯えたり、社会のために進んで譲ることである。

報徳仕法とは ②

尊徳の訓え（教え）を読みやすく分かりやすくまとめたものが『^{ほうとくくん}報徳訓』です。報徳の教えは、人が他から受けた徳に対して徳で応え報いることを教えています。非常に具体的で分かりやすく日常生活によく合っていたことから、農民にも理解されました。

安政3年（1856）に尊徳が亡くなると、尊徳のことをいちばんよく理解していた一番弟子の富田高慶が尊徳の伝記としてまとめたものが『報徳記』です。

明治になってから、旧藩主相馬充胤^{みちたね}を通して『報徳記』が明治天皇に献上されました。さらに明治16年には『報徳記』が宮内庁版として刊行され、知事以上の役職者に配付されました。さらに多くの役人にも読ませるため、明治18年には農商務省版も刊行されました。

報徳の精神は現代にも生き続けており、報徳仕法や二宮尊徳にゆかりのある市町村が毎年集まって『報徳サミット』を開催しています。平成12年2月19日には相馬市を会場として第5回報徳サミットが開催されました。